

「脱化石燃料」の時代にこそ、山村の価値を訴えよう

全国山村振興連盟常務理事・事務局長 實重重実

地球温暖化に悩む世界によって「脱炭素」ということが声高に叫ばれていますが、私は「脱炭素」という言葉には違和感を覚えます。むしろ「脱化石燃料」と言う方が正確なのでしょう。

炭素はすべての生物にとって、有機物の骨格を作る元素であって、炭素なしでは、私たちの体を構成するタンパク質、脂質、核酸も作ることはできません。食物連鎖を通じて、炭素を骨格とする有機物がぐるぐると循環し合っているのが自然界の姿です。だから「脱炭素」というだけではおかしいと思うのです。

これに対して化石燃料は、何億年も前に海底に沈んだプランクトンや、泥炭地に倒れて腐敗しなかった巨大シダ植物などが、長い時間をかけて圧力や熱で変成し、石炭・石油・天然ガスとなったものです。化石燃料を利用することによって、文明は飛躍的な発展を遂げました。それが、燃料革命でした。

こうした燃料革命が起こる以前、山村は経済社会の中で、極めて重要な地位を占めていました。山村には、①木材を育てるための森もあれば、②短期的に伐採しながら薪炭を供給するための森もあり、更には③竹や笹といったような特殊材を採集するための森もありました。

これらの森をうまく使い分けながら、地域での共同のルールを作って経済的基盤である森林を育ててきました。村落に近い里山では、建築材や薪炭用のほかに、肥料や敷料にするための野草、食料にするための果実・キノコなどの採集が可能であり、一方集落から離れた奥山では、大切に長期間かけて木材を育てました。こうした慣習の一部は、今も多くの山村で保存されていることでしょう。

現在の人類に緊急に求められている「脱化石燃料」という課題は、燃料革命によって失われてしまった生態系の循環を再び重視することが欠かせません。もちろん何も遠い昔に戻る必要はありません。今後の社会はITやAIによって大きく変化していくでしょうし、また太陽光発電などの再生可能エネルギーも更に進展していくことでしょう。これらを組み合わせれば、昔に戻る必要はないはずです。しかし脱化石燃料問題の根本には「生命の循環」がある、という本質に変わりはないでしょう。そして、山村はまさに、森と動植物と人間とが生命を循環させる空間です。

今、山村に住む人々だけでなく、日本社会が挙げて山村地域や、そこにおける森林管理・森林整備の重要性に着目し、森林環境譲与税・森林環境税をはじめとする施策を導入し始めました。森林環境譲与税ができたときには、「よくできたものだ」と感激したのですが、現在毎年のように異常気象による大規模災害が頻発する世界を眼にするにつけ、これは必然の結果だったのかもしれないと感ぜられるようになりました。国民全体も同じように感じていることでしょう。

地球社会全体が「脱化石燃料」に向かって一斉に走っている今こそ、山村地域の重要性を再び訴えていかなければならない時期なのだと思います。